



TITLE:

居庸關雲臺は過街塔基なり

AUTHOR(S):

小野, 勝年

CITATION:

小野, 勝年. 居庸關雲臺は過街塔基なり. 東洋史研究 1945, 9(3): 176-178

ISSUE DATE:

1945-11-05

URL:

<https://doi.org/10.14989/145826>

RIGHT:

居庸關雲臺は過街塔基なり

小 野 勝 年

昨秋、村田治郎博士を主班とする居庸關の雲臺の調査が行はれた。雲臺の史蹟的價值は申すに及ばず、これが根本的調査と保存對策の考究に就いて、日頃その必要を痛感してゐる自分は蒙古文化研究所の依頼に應じて、この調査に参加すべき光榮を有したのであつた

が、運つたなくも準備萬端と一のへた上で病臥の身となつた。然し調査の方は村田博士以下諸氏の熱意と努力により、短期間に大成功を納め、早くも調査略報告が「蒙古聯合自治政府宣化省延慶縣居庸關過街塔基調査假報告書」として印刷をみたことは、やがて出版さるべき本報告の前觸れとして、まことにうれしい限りである。しかもこの書を送呈して呉れた蒙古文化研究所の主事江實學士の私信によつて、張家口北京間の自動車路もこゝを避けて新たに設けられることが確定したとあり、既に前蒙古政府事務官小林知生學士の幹

旋によつて、了解はされてゐたものゝ、時移り人變り易き大陸のことなれば、その後は如何にやと心掛りの際、重ね／＼欣快事であつた。

さて、假報告書を續くに、十頁の小冊子、これに加ふるに三葉の寫眞と云つた次第で、稍、簡略に失するが、調査の經過は村田博士がその場で記した生々しい記録であつてみれば讀む者をして肝に銘せしめるところも多い。特にその一節たる「塔基說に就いての疑問」は從來殆ど深き反省なく塔基と信ずる者のみであつただけに、讀者の注意を惹くに充分であり、自分の如きも一讀して自己の見解を批判し、疑問は疑問として博士一個の疑問に過ぎざるとの斷案に達しつゝも、猶且つその學問的態度に敬意を表さざるを得なかつた。

こゝに同氏の疑問とする據りどころを列挙するに、
(一)建築後三四十年間の短期間に佛塔が佛殿に改めら

れたとする理由發見の困難、(一)佛塔の存在せる痕跡の缺除、(三)臺基平面の縦横の比例が一基或は三基の塔をのせるのに不釣合であるとの三點に歸するものの如くである。果して、然らばこゝに反問を提出し度い。それは第一に雲臺の拱道壁に一切如來鳥翹跂沙最勝總持の如き、佛頂放無垢光明入普門觀察如來心陀羅尼の如き、これを塔中に供養禮拜すれば惡業消滅して善種を生ずといふやうな造塔思想の強い陀羅尼を何故特に選んだかといふことである。これに就いては博士も既に「東壁には建塔の功德をのべた末に云々」と記し、上記の疑問を提出される前に一應斷つて居られることであれば、しばらく保留するとして、第二に塔基ならば縦横の比例が一對一或は一對三でなければ釣合がとれないといふことの根據は何んに基くであらうか。成程一塔の場合は一對一、三塔の場合は一對三、五塔縦或は横列の場合は一對五ならば釣合はよいであらう。然し多塔の場合若しそれに大と小とがあるとしたならば如何であらうか。まして現存例が自分の知る限り熱河喇嘛廟に於ける外殆んど見交けない過街式塔の場合に於て一對一、一對三でなければ釣合がとれない

いといふやうな所見は稍々單純に過ぎはしまいか。更に第三の點に就いても充分な説明がなければならぬ。第三の點といふのは雲臺の陸屋根の縁の四邊に勾欄が廻らされ、竈首を造り出してゐることである。「博士はこれを獅子頭とされてゐるが、一本の角、口や牙の具合から竈首と解すべきであらう」。この竈首の方は元代のものであると斷定すべき特色を探すのに少しく困難であるとしても、勾欄のハメ板に當る部分の花模様の彫刻は拱道内のそれと殆んど共通した手法を示すのみならず、元代流行のそれとしての特色を多分に持つてゐる。されば勾欄及び竈首は雲臺築造の當初から既に存在したものと解釋して先づ誤らない。しかしかゝるものは建築物の基部の裝飾物であつて、決して上部即ち屋根飾りではない。換言するならばこの建築物は博士がいはるゝ如く「石造の門であるといふ事實」を示すに止まらず、實はこの上に更に建築物を設けるべき基壇であつたことを物語つてゐる。それは佛殿であつてもよし、佛塔であつてもよい。否、北京の寶丘壇、社稷壇日月壇の如きたゞの壇、或は見晴しのための臺であつたといふ疑問も全くない譯ではない。

尤も若しこの建造物にはどの側からでもよいが登階といふものが設けられてゐたとしたならばの話である。不思議なことにこの建築物には最初から登階は造られてゐなかつた。實にかゝる痕跡が認められないのである。このことを建築物の上に更に神聖なるものの建築が行はるべき意圖の存してゐたことを識ひ得ないであらう。

「目下諸聞考」卷一〇七には下のやうな記事が見える。元時居庸關。遼溝橋俱有過街塔。按歐陽原功詩。

薊門城東過街塔。一一人行通寶間。則薊邱城門亦有之矣。行國錄。「行國錄」は誰の撰であるか博雅の示教に待たねばならず、其の點此處に引用するのは尙、弱みもある。然し何れ明のものであらう。従つてそれは元代居庸關に過街塔があつたとする或る程度確かな記事であると信じ度いのである。而も自分は上記した雲臺と合せ考へて、蓋しこそ「行國錄」の指す過街塔であると斷ずるのである。なほ一つ溯つて元の酒賈の「金臺集」卷二に上京紀行即ち大都から上都への旅行中の作詩があり、うちに居庸關と題するものがあることを思ひ出さう。その詩に序していふ、關北五里令勅

建永明寶相寺。宮殿甚壯麗。三塔跨於通衢。馬騎皆過其下と。實に好個の材料であるにも拘はらず關北五里に煩はされてわれ乍ら困じた。然し關北五里とは關北十五里、令は百の誤りであるとわかつて永解の思ひがする。こゝに關とは居庸の南口に外ならない。現に居庸關とよぶ場所は南口を去ること十五支里であるが、廣義の關は南口から北口に至る四十支里の間に設けた四ヶ處の關門、即ち南口、居庸關、上關、北口をくくめて指す。元代兵を置いて専ら守備したのは主として南北口であつた。酒賈がこゝに關と云ふは彼の詩文の前後から推して南口に外ならず、従つて關北五里は關北十五里の誤りとせねばならぬ。然らばこゝに「三塔、前書に跨る」とは實に「行國錄」に所謂過街塔即今の雲臺を指すのである。顧炎武「昌平山水記」を著し、酒賈の詩序を引用して、論を結び「今その二を亡ふ」と述べてゐる。三塔を三基一門と解さず、三基三門と解したのは字林の誤りであつた。一門の上に三基竝立したればこそ取り除きが容易であつて、跡に佛堂建立のはこびとなつた所以ではなかつたか。雲臺は過街塔基で曾て上に三基の佛塔が建つてゐたと改めてここに主張し度いのである。(昭和十九年五月二十五日夜)